

王様
王妃
村の男

その他の顔

春

王冠が一つある。

顔

（あるところに耳なしと呼ばれる男がいた。その男はその名の通り右の耳がなかった。その男について本当の名前もわからないし、なんで右の耳がなくなつたのかも、いつ頃からそれがないのかも分からぬ。ただ、耳なしと呼ばれる男がいつのころからそこにいたという話だ。しかし、耳なしと呼ばれる男には右の耳だけではなく実は左の耳もなかつた。それどころか鼻も目も口もなく、だいたい顔がなかつたし、腕も足もなく、そもそも身体そのもののがなく、つまりなんにもない男であつた。なんにもないので本当は男だかどうだかもわからぬのだが、ここでは便宜上、男ということにする。しかし、なんにもない男のことについて話せることはあまりないので耳なしと呼ばれる男の話は終わりにしてもう一つ別の話をする。あるとき突然、王様と名乗る男がやつてきて、その王様の話を聞かされている村の男の話だ。その村にはスワステカという名前の男が一人だけ住んでいた。スワステカというのはほんとうの名前ではない。その男は昔、別の名前で呼ばれていたが、村に誰もいなくなり、名前も呼ばれなくなるとすっかり忘れてしまつた。しかし呼ぶ名前がないのは物語を伝える上で大変不便なので、後ほどそう呼ばれることになるスワステカという名前をここでも使う。これはそのスワステカの物語だ。）

顔
（どこでもない所に国があつて、なんといふこともない王様がいた。）
王様
顔
（と、王様と名乗るその男は言つた。）
王様
顔
（それがわたしだ。）

（どこでもない所に国があつて、なんということもない王様がそこにいた。）

顔
王様

それがわたしだ。

（王様はいつも輝く大きな肘掛け椅子に座り、将棋盤を前に深い物思いにふけっていた。王様に三人の子供が生まれた。三人とも男の子だった。最初に二番目の子供が死に、次に最初に生まれた子供が死に、ついに最後に生まれた子供だけが生き残った。生き残った子供はやがてその国の最後の王様になつた。）

王様
間違えた、それがわたしだ。

顔
（と、王様と名乗るその男は言った。ところで椅子はないか？私は椅子に座らなければいけない。私のようなものはいつも椅子に座つていなければいけないのだ、そうだろう？私の言葉は分かるか？と王様と名乗るその男は言った。スワステカは王様と名乗る男のために椅子を用意した。男はそれに座つた。）

顔
（見ればわかるとおり私は王様だ。私は理由があつて我が国を出ることになり、旅をしている。ずいぶん長い旅の途中で目的地はまだ遠いが、たいへん疲れているので今夜休める場所を探している。ここはとてもいい、気に入った。ほら穴がたくさんあるがそれはお前の家であるのか？なんという国なのだ？お前のほかに誰も住んでいないようだが、なぜ一人で住んでいるのか？お前はいったい何をするためにこんな誰もいないところに住んでいるのか？ここには王様はいるのか？と王様は言った。ひとりではない、ほかにも何人か住んでいる、とスワステカはとつさにうそをついてみようとしたが、人としばらく話ををしていなかつたためうまく言葉を思い出せず結局口をもぐもぐさせただけだった。ははーん、やはり言葉がわからないのか？と王様と名乗る男は口をもぐもぐさせてているスワステカを見て言つた。それはそれでかまわない、わが国は大変な文明国であるし、その文明をあまねく知らしめる使命もある。ぜひお前にわが国の言葉を教えてあげよう。ところで椅子はこれしかないのか？もっとおおきな椅子がいいのだが、と王様は言った。）

顔
（気に入らないながらも椅子に座ると少しだけ安心したのか、王様と名乗る男は元気を取り戻し、延々しやべり続けた。話の内容はほとんど自分の国はとても大きく、人もたくさんいて世界で最も進んだ文明を持っており、たいへん素晴らしいというものだったが、そのうちしやべり疲れて眠つてしまつた。王様と名乗る男はいつたん眠るとそれから一週間にわたつて目を覚まさなかつた。

顔
（よく見ると王様と名乗る男の隣に女が立つていた。王様の妻だから王妃と

いうことになる。王妃は汚い頭巾をかぶり、ずっと黙って立っていた。王様と名乗る男が眠っているあいだ、王妃は何もしゃべらなかつた。スワステカはそのうちおなかが減つたのでじやがいもを焼いて、それを王妃にも勧めてみたところ、王妃は何も言わず食べた。じやがいもはこの村で育つ数少ない植物で、こればっかりはよく採れた。じやがいもを食べながら、スワステカは王妃にお前はなぜ眠らないのかといつた。)

王妃 なんだ、しゃべれるのか。

村の男 しゃべれる。

王妃 さつきはなぜしゃべらなかつた。

村の男 うまく思い出せなかつた。

王妃 何を？

村の男 言葉をだ。お前はなぜ眠らないのだ？

王妃 私は大丈夫だ。

村の男 眠くないのか？

王妃 眠い。

村の男 それなら眠つたらしい。

王妃 でも私が眠つたら、お前は私になんかすると思う。

村の男 なんにもしない。

王妃 すると思う。するに違いないと思う。

村の男 しない。

王妃 王様のために貞操を守るのが私の仕事だ。だから眠らない、と私は言った。そうか、それは大切な仕事だと村の男は言つた。ここは何という場所でお前は何という男だ、と聞いたが、村の男はずつと一人で暮らしてきたのでどうやら言葉もこの村の名前も自分の名前も忘れてしまつた、言葉のほうは少しづつあの男が話しているのを聞きながら思い出したが、名前のほうは思い出せない、と言つた。男の言つていることはほんとうのようと思えた。なぜなら、それから王である夫が目覚めるまで、何日もずっと起きていたが誰にも会わなかつたし、ほんとうに廃墟に来たようだつた。村の男は私がずっと起きている間、眠りもせず、ほんのたまに、もぐもぐと私にしゃべりかけてきた。男が私の眠るのを待つてるのは明白だつた。いかにもいやらしい顔をしていたし、太い指と、それよりさらに太い腕はスワステカを思い起させた。

（スワステカというのは王妃がまだニコルだかニコラだかと呼ばれていた子

顔